

要旨：本発表の目的は、福岡県柳川市方言における「行く」の活用を記述し、補充法が生じていることを示すとともに、それぞれの形態が出現する環境を明らかにすることである。九州方言の一部においては「行く」を表す動詞として *ik* を含む形式（例：*iku*「行く」、*ikan*「行かない」）と *itar* を含む形式（例：*itatte*「行って」）が出現する。鹿児島諸方言を対象とした先行研究は、談話資料のデータを基に、両者がアスペクトの観点で使い分けられる類義語の関係にあると主張する。一方、本発表が対象とする柳川方言については、(a) *ik* を含む形式は全ての活用形をとりうるのに対し *itar* を含む形式は想定される活用形をほとんどを欠き、(b) *itar* を含む形式が出現する環境は形態論的環境によって説明できる。これらから、少なくとも柳川方言においては元々異なる動詞であった *itar*-「至る」が *ik*-「行く」のパラダイムに取り込まれるという補充法が生じていると主張するとともに、それぞれの形態が出現する共時的な環境を示す。

1. はじめに

本発表¹は、福岡県柳川市方言（以下、柳川方言）における「行く」の活用を記述し、補充法が生じていることを示す。補充法は、例えば英語の *go* と *went* のように、意味的には普通の対応をもつ一方、形式的にはイレギュラーな対応をもつ関係である（Mel'čuk 1994: 342）。以下に柳川方言における「行く」の例を示す。(1) に示すように、継起接辞-*te* をとる場合には *ik* と *itar* のいずれを含む形式も容認されるが、(2, 3) に示すように、否定接辞-*n*、非過去接辞-*ru* をとる場合は *ik* を含む形式のみが容認される。

- | | | |
|---|---|--|
| (1) <i>it-te/itat-te</i>
行く-SEQ「行って」 | (2) <i>ik-a-n/*itar-a-n</i>
行く-THM-NEG「行かない」 | (3) <i>ik-u/*itar-u</i>
行く-NPST「行く」 |
|---|---|--|

九州方言の中でも肥筑方言と薩隅方言では、「行く」という意味をもつ動詞として、*ik* を含む形式と *itar* を含む形式が出現する（3節）。木部（2014）は、鹿児島諸方言を対象に、これらはアスペクトによって使い分けられる類義語であると分析する。本発表では、柳川方言の記述データを基に、柳川方言においては、これらは類義語の関係にあるのではなく、補充法の関係にある、すなわち、*itar* を含む形式は「行く」のパラダイムに取り込まれていると主張する。*itar* を含む形式は、-*te* および完了接辞-*tor* など-*te* を通時的に含む接辞（以下、T接辞）が後続する場合にのみ出現する。ただし、*ik* を含む形式と *itar* を含む形式は相補分布しておらず（1）、この点で不完全な補充法である。

2. 前提の導入

本節では、補充法についての用語の整理をする。補充法とは、意味的には普通の対応であるにもかかわらず、形式的にはイレギュラーな対応にあるような関係を指す（Mel'čuk 1994: 342）。補充法は大きく二つに分類される。一つは、英語における *go* と *went* のように、元々は異なる語根であったものが同じ語根の異形態としてふるまうようになる強補充法（strong suppletion; Dressler 1985: 330, Haspelmath

¹ 以下、断りのない限り本発表のデータは発表者フィールドデータによる。データは、柳川方言の話者（80代話者1名、70代話者3名）から収集したものである。本発表に含まれるいかなる誤謬も、その責任は全て発表者に帰する。本発表は、科研JP22J11135で収集したデータを用いている。

and Sims 2010: 25) であり、もう一つは、英語における *buy* と *bought* のように、それぞれの形態どうしに音韻的な類似点はあるものの通常の音韻規則で説明できない弱補充法 (weak suppletion; Dressler 1985: 331, Haspelmath and Sims 2010: 25) である。強補充法は、ある語のパラダイム内に、意味的に類似した語のパラダイムの一部が侵入するという通時的変化の結果として生じ、この変化は断続的ではなく徐々に進行する (Rudes 1980, Bybee 1985, Maiden 2004, Börjars and Vincent 2011 など多数)。4 節で記述するように、柳川方言の「行く」を表す動詞は *ik* を含む形式と *itar* を含む形式をもつ。本発表は、柳川方言において *ik*-「行く」のパラダイムに *itar*-「至る」に由来する動詞のパラダイムが侵入することで補充法が生じたと主張する。

3. 九州方言における「行く」を表す語の先行研究

本節では、九州方言における「行く」を表す語についての先行研究を概観する。九州方言は、主に共時的な語彙・音韻・形態統語的特徴によって、東部で話される豊日方言、北西部で話される肥筑方言、南部で話される薩隅方言に大別される (東条 1953)。これまでの研究において、「行く」の活用に補充法が見られると明示的に示した研究はない (3.1 節)。肥筑方言と薩隅方言で「行く」を表す語として *ik* を含む形式だけでなく *itar* という形式を含む形式が報告されており、これらは先行研究によってアスペクトによって使い分けられる類義語であると分析されている (3.2 節)。

3.1. 「行く」の活用

九州方言を対象とした研究のうち「行く」の活用に言及した研究 (例: 福岡県福岡市方言 (平塚 2014), 福岡県八女方言 (内山 1973), 佐賀県北方方言 (原田 2019), 長崎県宇久島野方方言 (中村 2019), 長崎県福江島崎山方言 (立山 2020), 長崎県雲仙市南串山町鬼池方言 (野田・東出 2024), 熊本県菊池方言 (藤本 2002: 105-106), 熊本県菊鹿方言 (立花 2022), 鹿児島県甑島里方言 (黒木・野間 2015), 鹿児島県内之浦方言 (高城 2022) など多数) の多くは、*itar* を含む形式について言及していない²。

佐賀県北山方言を対象とした小野 (1969: 386-387), 鹿児島県串木野方言を対象とした黒木 (2024) は、「行く」を表す動詞について、*ik* を含む形式 (例: *iku* 「行く」) に加え、継起接辞 (-*te*) が後続する場合に *itar* を含む形式 (例: *itate* 「行って」) も出現すると記述している。小野 (1969), 黒木 (2024) の記述は *ita* という形式が「行く」を表す形態素の異形態であり、補充法が生じている可能性を示唆するが、詳細については述べられていない。

3.2. *ik* を含む形式と *itar* を含む形式

九州方言のうち、前節で見た佐賀県北山方言 (小野 1969: 386-387), 鹿児島県串木野方言 (黒木 2024), そして長崎県諸方言 (愛宕 1983), 鹿児島諸方言 (木部 2014) において、「行く」を表す語として *ik* を

² 九州方言を対象とした有元光彦氏の一連の研究 (熊本県天草方言 (有元 2005, 2015), 葦北郡津奈木町方言, 人吉市方言, 球磨郡五木村方言 (有元 2011), 長崎県中北部本土方言 (有元 2008), 中南部本土方言 (有元 2009), 鹿児島県岡見ヶ水方言 (有元 1996: 141), 阿久根市方言 (有元 2011), 日置方言, 知覧方言, 南大隅佐田方言 (有元 2016) など) において、「行く」は不規則語幹であり、継起接辞をとる際に *ita* を含む形式 (*itate*) が出現することが記述されている。有元氏の一連の研究は、動詞が継起接辞をとりそれに補助動詞が後続する環境に着目している。このため、「行く」を表す語根に継起接辞以外の接辞 (例: 否定接辞) が後続する場合にどのような形式が現れるかについての言及はなく、*ik* を含む形式が出現するか否か、出現する場合にはそれと *ita* を含む形式がどのような関係にあるかは不明である。

含む形式と *itar* を含む形式が出現することが指摘されている³ (表 1)。*itar* を含む形式は、音韻的、意味的類似性から標準語の「至る」に由来すると指摘されている (愛宕 1983: 35)。表 1 内において Q はいわゆる促音を示し、括弧に括って示す(Q)はその促音が脱落しうることを示す。

表 1. 九州方言における「行く」を表す語根の形式 (表記は発表者一部変更)

方言	「行く」を表す形式	<i>ita(Q)</i> -が出現する例の環境
佐賀県北山方言 (小野 1969: 386-387)	<i>ik-, iQ-, ita(Q)-</i>	継起接辞 (- <i>te</i>) が後続
長崎県諸方言 (愛宕 1983)	<i>ik-, i-, ita(Q)-</i>	継起接辞 (- <i>te</i>)、完了接辞 (- <i>tor</i>)、条件接辞 (- <i>eba, -rya</i>) が後続
鹿児島県諸方言 (木部 2014)	<i>ik-, ita-</i>	継起接辞 (- <i>te</i>) が後続
鹿児島県串木野方言 (黒木 2024)	<i>ik-, ita-</i>	継起接辞 (- <i>te</i>) が後続

表 1 から明らかなように、先行研究が *ita(Q)*-の具体例としてあげている形式は、条件接辞をとる例もあるものの、継起接辞 (-*te*) をとる例に偏る。これは、継起接辞が後続する際に偏って、あるいは限定して、*ita(Q)*を含む形式が出現する可能性を示唆する。しかし、先行研究の多くはそれぞれの形式の例を示すにとどまり、これらの形式の関係、それぞれの形式の出現環境は明らかでない。

*ita(Q)*を含む形式の出現環境および *ik* を含む形式との関係について明示的に指摘している先行研究には、鹿児島諸方言を対象とした木部 (2014) がある。木部 (2014) は、鹿児島各地で収集された昔話資料を文字化したものである『鹿児島ふるさとの昔話』を基に、「行く」という意味を表す「イッ (いく)」と「イタッ (いたる)」の違いを指摘している。木部 (2014) は、「イッ」と「イタッ」の出現例から、「イッ (いく)」の形式はある場所へ移動することを表すのに対し、「イタッ」はある目的のためにある場所に移動し、到着することを表すとする。このため、「イタッ」は到着を含意する継起接辞をとる場合に生じるのに対し、「イッ」にはそのような制限はない。以下では、木部 (2014) による分析を「意味分析」と呼ぶ。

意味分析には二つの問題点がある。一つは、「イタッ」に想定される活用形の多くが欠けていることが説明できない点である。意味分析が主張するように「イタッ」が到着を含意するのであれば、例えば到着するというイベントが完了した場合には過去接辞を、「到着しろ」という意味で命令接辞を、「到着しない」の意味で否定接辞をとることが予想される。しかし、「イタッ」が想定される活用形の多く (例：過去形、命令形、否定形) をとることができないことを、木部 (2014) はエリシテーション調査によって明らかにしている。「イタッ」がなぜ活用形の多くを欠くのかは、意味分析からは説明できない。

もう一つの問題点は、木部 (2014) の提示するデータからは他の解釈も可能であるという点である。木部 (2014) の記述データからは、単に *-te* が後続するときには「イタッ」の形式が現れうるという分析、すなわち形態論的な環境によって「イッ」が出現するか「イタッ」が出現するか、いずれも出現しうるかが決まるという分析も可能である (以下、補充法分析)。木部 (2014) は、補充法分析の可能性を考慮していない。

³ 豊日方言 (例：宮崎県椎葉村尾前方言 (宮岡 2022, 筆者フィールドデータ)、大分県方言 (糸井 1983)、大分県大野郡野津町西神野方言 (糸井 1960)、大分県九重町方言 (糸井 1964)、大分県由布市庄内町方言 (松田 2017) など) では、同様の現象は報告されていない。

3.3. 意味分析と補充法分析の異なる予測

意味分析と補充法分析は、「行く」を表す語根と継起接辞の間に派生接辞（例：尊敬接辞）が存在する場合に、異なる予測をする。意味分析は、ある目的のためにある場所に移動し、到着するという意味を表す場合には、語根と継起接辞の間に尊敬接辞などの派生接辞が出現する際にも *itar* を含む形式が出現することを予測する。一方、補充法分析は、「行く」を表す語根と *-te* との間に尊敬接辞など他の接辞が出現する場合には *itar* を含む形式が出現しないことを予測する（表2）。

表2. それぞれの分析による *itar* を含む形式の出現予測

	意味分析の予測	補充法分析の予測
「行く」-継起接辞	○ (<i>itatte</i> ; 至る-SEQ)	○ (<i>itatte</i> ; 行く-SEQ)
「行く」-接辞-継起接辞	○ (<i>itarinahatte</i> ; 至る-THM-HON-SEQ)	× (<i>*itarinahatte</i> ; 行く-THM-HON-SEQ)

木部（2014）は主に談話資料を基に議論しており、表2下段のような環境で *itar* を含む形式が出現しうるか否かは明らかではない。エリシテーション調査においても、*itar* を含む形式に屈折接辞のほとんどが直接後続しないことを示している一方で、表2下段のように語根と継起接辞の間に他の接辞が出現する例については言及していない。このため、示されているデータから鹿児島諸方言において意味分析と補充法分析のどちらが適切な分析かを判断することはできない。4節では、柳川方言を対象に「行く」を表す形式の出現環境をエリシテーション調査データを基に記述し、その上で、少なくとも柳川方言においては、意味分析ではなく、補充法が適切であると主張する。

4. 柳川方言における「行く」の活用

4.1. 動詞形態論の概要

本節では、柳川方言における「行く」の活用を示すに先立ち、動詞形態論の概要を示す。詳細については、松岡（2021）、松岡（2022）、Matsuoka（2022）を参照されたい。

派生接辞には、ヴォイス接辞（使役-*sase*、受動-*rare*）、可能接辞（-*das*、-*rare*）、アスペクト接辞（未完了-*yor*、完了-*tor*、予期完了-*tok*）、尊敬接辞（-*mes*、-*nahar*、-*rass*）がある。（4）にこれらの相互承接を示す。屈折接辞には表3に示すものがある。表3には、結論を先取りし、「行く」にそれぞれの屈折接辞が後続した形式を合わせて示す。派生接辞のうち完了接辞-*tor*と予期完了接辞-*tok*、屈折接辞のうち-*ta*、-*tara*、-*tai*は、通時的には継起接辞と補助動詞（-*tor*は *or*-「いる」、-*tok*は *ok*-「置く」、-*ta*、-*tara*、-*tai*は *ar*-「ある」）に由来する。以下では、継起接辞及び通時的に継起接辞を含む接辞を T 接辞と呼ぶ。

(4) 語根 (-*sase*) (-*rare*) (-*tor*/*tok*) (-*yor*) (-*mes*) (-*nahar*/*rass*) -屈折接辞

表3. 動詞がとる屈折接辞（松岡 2021: 42 を基に本稿筆者一部変更）

			肯定	否定
主節	直説法	非過去	-ru (<i>iku</i> / <i>*iru</i> / <i>*itaru</i>)	-n (<i>ikan</i> / <i>*in</i> / <i>*itaran</i>)
		過去	-ta (<i>itta</i> / <i>ita</i> / <i>itatta</i>)	-n= <i>yat</i> -ta

	義務法	非過去	-yan (<i>ikayan/*iyan/*itarayan</i>)	
		過去	-yan=yat-ta	
	推量法		-u (<i>ikoo/*iu/*itaroo</i>)	-n=yar-oo
	意志法		-u (<i>ikoo/*iu/*itaroo</i>)	
	命令法		-ro/-re/-i (<i>ike/*iro/*itare</i>)	
副詞節		継起	-te (<i>itte/ite/ita(t)te</i>)	-nna (<i>ikanna/*inna/*itaranna</i>)
		条件	-tara (<i>ittara/itara/itattara</i>)	
		並列	-tai (<i>ittai/itai/itattai</i>)	
		目的	-ge	

4.2. 「行く」の活用

本節では、「行く」¹を表す語根の出現環境を記述する。まず、補充法分析に立った上で「行く」の活用を示し、その後、意味分析ではなく補充法分析を採用する根拠を示す。

「行く」を表す語根には、ここまで言及した *ik-*、*itar-*のほか *i*⁴の三つがあり、後続する接辞によっていずれが現れうるかが決まっている（それぞれの語根と屈折接辞の組み合わせについて、表3）。これらの形態の出現環境は相補分布しておらず、継起接辞-*te*、過去接辞-*ta*、条件接辞-*tara*、並列接辞-*tai*が後続する場合にはすべての形態 (*ik-*、*itar-*、*i*) が、完了接辞-*tor*、予期完了接辞-*tok* が後続する場合には *ik-*と *itar-*が現れうる（表4）。

表4. 「行く」の諸形態

	後続する接辞		
	T 接辞		T 接辞以外
	- <i>te</i> , - <i>ta</i> , - <i>tara</i> , - <i>tai</i>	- <i>tor</i> , - <i>tok</i>	
<i>ik-</i>	○ (<i>it-te</i>)	○ (<i>it-tot-te</i>)	○ (<i>ik-u</i>)
<i>itar-</i>	○ (<i>ita(t)-te</i>)	○ (<i>ita(t)-tot-te</i>)	× (<i>*itar-u</i>)
<i>i-</i>	○ (<i>i-te</i>)	× (<i>*i-tot-te</i>)	× (<i>*i-ru</i>)

柳川方言においては、*itar-*と *ik-*の出現環境の違いは、補充法によるものと分析するのが適当である。3.3 節で、意味分析は語根と継起接辞の間に他の接辞が出現しても *itar* を含む形式の出現を予測するのに対し、補充法分析は *itar* を含む形式が出現しないことを予測することを示した。表5は、語根と

⁴ *i*-については、*ik-*が形態音韻交替の結果 *i*-として現れているという分析も可能である。具体的には、*ik-ta* が *ii-ta* に交替し（いわゆる「イ音便」）、*ii-ta* の *ii* の一方の母音が削除され *i-ta* となったと分析することが可能である。しかし、以下に述べる理由により、このような分析はとらない。柳川方言においては、*k* 終わりの語根（例：*kak-*「書く」、*tatak-*「叩く」）に T 接辞が後続する場合には、以下のような形態音韻交替が生じる。まず、語根末の *k* が *i* へ交替する (*kak-ta*→*kai-ta*)。次に、母音融合が生じる (*kai-ta*→*keeta*, *tatai-ta*→*tatee-ta*)。最後に、母音融合の結果生じた母音連続が、語の頭から数えたフット境界を分断するとき、片方の母音が削除される (*tate-ta*) (松岡 2021)。仮に *ita* という語形の基底に *ik-ta* を認めた場合、*ik-*にのみ適用される形態音韻規則を設定する必要がある。具体的には、語根末の *k* の *i* への交替、母音融合のあと、フット境界を分断しないにもかかわらず長母音のうちの母音の一方を削除する規則が必要となる。*ik-*にのみ適用されるアドホックな形態音韻規則を設定することを避けるため、本稿では *i-*という語根を設定する。なお、「行く」の語根に *i-*を含む形態が出現する現象は、豊日方言を含む九州方言において広く見られる。

継起接辞の間に他の接辞が出現する例をまとめたものである。ただし、予期完了接辞-*tok*については、これに他の T 接辞は後続できない（例：**mitoite*「見ておいて」）ため考察外としている。この環境において *itar* を含む形式が出現できるのは、語根と継起接辞の間に T 接辞である-*tor* が出現する場合のみである。すなわち、柳川方言においては、*itar* を含む形式の出現は T 接辞（-*te* および通時的に-*te* を含む接辞）が直接後続する場合に限られ、補充法分析の予測に一致する。

表 5. 語根と継起接辞の間に他の接辞が出現する例

	- <i>sase</i>	- <i>rare</i>	- <i>tor</i>	- <i>yor</i>	- <i>mes</i>	- <i>nahar/-rass</i>
<i>ik-</i>	○(<i>ikasete</i>)	○(<i>ikarete</i>)	○(<i>ittotte</i>)	○(<i>ikiyotte</i>)	○(<i>ikimesite</i>)	○(<i>ikinahatte/ikasite</i>)
<i>itar-</i>	×(<i>*itarasete</i>)	×(<i>*itararete</i>)	○(<i>itattotte</i>)	×(<i>*itariyotte</i>)	×(<i>*itarimesite</i>)	×(<i>*itannahatte/*itarasite</i>)
<i>i-</i>	×(<i>*isasete</i>)	×(<i>*irarete</i>)	×(<i>*itotte</i>)	×(<i>*iyotte</i>)	×(<i>*imesite</i>)	×(<i>*inahatte/*irasite</i>)

なお、*ik-*、*itar-*、*i-*の全てが出現しうる環境であっても、諸形態の出現頻度は一様ではない。表 6 に、約 10 時間の自然談話における「行く」の出現例（全 336 例）を、後続する接辞に着目しまとめたものを示す。継起接辞-*te* が後続するときは、全ての形態が確認できるものの、*itar-*の頻度が最も高い。継起接辞-*te* と *ar-*に由来する-*ta*、-*tara*、-*tai* が後続するときは *i-*の頻度が高く、エリシテーション調査で容認された *itar-*は出現していない。継起接辞-*te* と *or-*「いる」に由来する-*tor*、継起接辞-*te* と *ok-*「置く」に由来する-*tok* が後続するときは *itar-*の頻度が高く、エリシテーション調査（表 4）で容認されない *i-*の形態は出現していない。

表 6. 「行く」の諸形態の出現頻度

	後続する接辞						
	T 接辞						T 接辞以外
	- <i>te</i>	- <i>ta</i>	- <i>tara</i>	- <i>tai</i>	- <i>tor</i>	- <i>tok</i>	
<i>ik-</i>	7/48	10/39	0/8	1/3	1/32	0/2	214/214
<i>itar-</i>	39/48	0/39	0/8	0/3	31/32	2/2	0/214
<i>i-</i>	2/48	29/39	8/8	2/3	0/32	0/2	0/214

強補充法が生じる過程とは、ある語のパラダイム内に、意味的に類似した他の語のパラダイムの一部が侵入する過程である。この過程では、侵入される語が対応する語形をもつものあまり出現せず、一方で侵入する語の対応する語形が頻出するという状況が生じる（Rudes1980: 666, Bybee 1985: 91-92）。柳川方言における諸形態の出現頻度の違いは、この状況を反映している可能性がある。

5. おわりに

九州方言のうち、肥筑方言および薩隅方言においては、「行く」を表す動詞に *ik* を含む形式と *itar* を含む形式がある。本発表は、少なくとも柳川方言においては両者が「行く」という意味を表す語根の異形態の関係にあり、通時的には *ik-*という動詞のパラダイムに標準語の *itar-*「いたる」に対応する動詞が

侵入した結果として補充法が生じたものと分析した。

今後の課題は、他の九州方言においても「行く」を表す動詞に補充法が見られるか検証すること、そして、それぞれの方言における *itar* を含む形式の出現環境を記述することである。3 節で示したように「行く」という意味の動詞が *itar* を含む方言は多くあり、これらの方言における当該形式の例は継起接辞をとる形式に大きく偏る。これらの方言についても柳川方言と同様に補充法が生じている可能性があり、*ik* を含む形式と *itar* を含む形式が類義語の関係にあると分析されている方言を含めこれを確認する必要がある。なお、現時点では、福岡県大牟田市方言（発表者フィールドデータ）、鹿児島県内之浦方言（高城隆一氏 2023 年 p.c.）において補充法が見られることを確認している。

補充法においてどの形態がどの環境で出現するかには、系統内の言語であっても差が見られる。前述した大牟田方言、内之浦方言では、柳川方言より *itar* を含む形式が出現する環境が狭く、T 接辞のうち継起接辞 (-*te*) と存在動詞 *ar-* に由来する接辞（例：過去接辞-*ta*）が後続する場合には、*itar* を含む形式は許容されない（例：**ita(t)ta*）。3.2 節表 1 で見た長崎県諸方言においては、柳川方言と異なり、条件接辞をとる際にもこれが生じる例が示されている（*itareba* 「行くと」愛宕 1983: 34）。このような方言差についても確認する必要がある。

略号一覧：NEG: 否定, SEQ: 継起, THM: 語幹拡張母音, HON: 尊敬

参考文献：愛宕八郎康隆（1983）「長崎方言の「イタチ コイ。」などの表現」『国語と教育』8: 33-36./ 有元光彦（1996）「岡児ヶ水方言の動詞テ形について」九州方言研究会（編）『九州方言研究会報告書』140-151. 鹿児島：九州方言研究会./ 有元光彦（2005）「熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 自然科学』55(1): 1-14./ 有元光彦（2008）「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 人文科学・社会科学』57(1): 1-13./ 有元光彦（2009）「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 人文科学・社会科学』58(1): 15-31./ 有元光彦（2011）「熊本県本土南部・鹿児島県本土北西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 人文科学・社会科学』60(1): 25-38./ 有元光彦（2015）「天草諸島方言の多様性：御所浦島方言・獅子島方言の動詞テ形音韻現象」『研究論叢 人文科学・社会科学』64(1): 31-46./ 有元光彦（2016）「鹿児島県本土西部・南部方言におけるテ形音韻現象の記述」『研究論叢 第 1 部・第 2 部, 人文科学・社会科学・自然科学= Bulletin of the Faculty of Education, Yamaguchi University. Pt. 1, pt. 2』66: 15-29./ Börjars, Kersti and Vincent, Nigel (2011) The pre-conditions for suppletion. In: Alexandra Galani, Glyn Hicks and George Tsoulas (eds) *Morphology and its interfaces*, 239-267. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. /Bybee, Joan (1985) *Morphology: A Study of the Relation Between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins./ 藤本憲信（2002）『熊本県菊池方言の文法』熊本：熊本日日新聞社./ 原田走一郎（2019）「佐賀県武雄市北方方言」『全国方言文法辞典資料集(5) 活用体系(4)』89-96./ Haspelmath, Martin and Andrea Sims (2010) *Understanding Morphology*. Abingdon: Routledge./ 平塚雄亮（2014）「福岡県福岡市方言」『全国方言文法辞典資料集(2) 要地方言の活用体系記述』125-134./ 糸井寛一（1960）「南豊後山村方言における動詞の活用体系」『大分大学学芸学部研究紀要 人文・社会科学 B 集』1(9): 67-94./ 糸井寛一（1964）「九重町方言の動詞の語形表」『大分大学学芸学部研究紀要』2(4): 28-54./ 糸井寛一（1983）「大分県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『九州地方の方言』237-266. 東京：国書刊行会./ 木部暢子（2014）「鹿児島方言の「イッ」と「イタッ」—テキストを使った方言研究の実践—」『西日本国語国文学』1: 72-85./ 黒木邦彦（2024）「CROJADS」<https://www.dropbox.com/sh/sv31ah3h8ufsgvp/AADMneRmYmWl-OC2K3fVODEia?e=1&dl=0> [最終アクセス 2024 年 4 月 27 日]./ 黒木邦彦・野間純平（2015）「形態論」森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）『甌島里方言記述文法書』61-90. 立川：国立国語研究所./ 松田美香（2017）「大分県由布市庄内町方言」『全国方言文法辞典資料集(3) 活用体系(2)』143-153./ 松岡葵（2021）「福岡県柳川市方言の文法概説」九州大学、修士論文./ 松岡葵（2022）「福岡県柳川市方言」『全国方言文法辞典資料集(7) 活用体系(5)』43-55./ Matsuoka, Aoi (2022) Yanagawa. In: Shimoji, Michinori (ed.) *An Introduction to the Japonic Languages: Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages*. 261-292. Brill: Leiden./ Maiden, Martin (2004) When lexemes become allomorphs - On the genesis of suppletion. *Folia Linguistica* 38 (3-4): 227-256./ Maiden, Martin and Anna Thornton (2022) Suppletion. In: Adam Ledgeway and Martin Maiden (eds.) *Cambridge Handbooks in Language and Linguistics*. 371-399. Cambridge: Cambridge University Press./ Mel'cuk, Igor (1994) Suppletion: toward a logical analysis of the concept. *Studies in Language* 18(2): 339-410./ 宮岡大（2022）「動詞形態論」椎葉村方言語彙編集委員会（編）『椎葉村方言語彙集』699-712./ 中村京介（2019）「長崎県五島列島宇久島野方方言の文法概説」修士論文、東京外国語大学./ 野田智子・東出朋（2019）「長崎県雲仙市南串山町鬼池方言」『全国方言文法辞典資料集(8) 活用体系(6)』15-24./ 小野志真男（1969）「佐賀県北山方言」九州方言学会（編）『九州方言の基礎的研究』351-414. 東京：風間書房./ Rudes, Blair (1980) On the nature of verbal suppletion. *Linguistics* 18: 655-676./ 立花千夏（2022）「熊本県山鹿市菊鹿町方言の動詞屈折形態論」卒業論文、九州大学./ 高城隆一（2022）「鹿児島県肝付町（内之浦）」セリックケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一（編）『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』267-314. 立川：国立国語研究所./ 立山芽衣（2020）「長崎県五島列島福江島崎山方言における動詞屈折形態論の記述」九州大学、卒業論文./ 東条操（1953）『日本方言学』東京：吉川弘文館./ 内山一兄（1973）「八女方言の語法」内山一兄・郷田敏男（編）『八女の方言』34-177. 八女：八女の方言研究会。